

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22530679

研究課題名(和文)立場が異なる相手との相互作用を阻む否定的な推測の生起過程と修正方略の実験的検討

研究課題名(英文) Experimental examination of processes that produce negative inferences which prevent interaction with others in different situations.

研究代表者

工藤 恵理子 (KUDO, Eriko)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：50234448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：相手の立場に立つて考えること自体は一般に望ましいこと認識されている。しかし、これまでの研究からは、そのような思考が逆に否定的な効果をもたらすことが指摘されている。そこで、素朴に相手の立場に立つて考えることがその後の思考や判断に否定的影響をもたらすことを確認し、さらにはそのような否定的影響をもたらさず、相互作用を円滑にすることに寄与する視点取得の方略を実験室実験によって検討した。検討の対象としたのは相手の立場に立つて考える視点取得方略、相手になったつもりで想像するシミュレーション方略、相手の気持ちを想像する共感方略とした。また、それらがもたらす影響については潜在過程への影響を含めて検討した。

研究成果の概要(英文)： Taking perspective of others is considered as a desirable way to cope with others. Previous studies however have shown that this strategy generate unexpected negative consequences. Present research aimed to show the negative consequences of naive perspective taking and find a perspective taking strategy that does not produce such negative consequences. Specifically, simulation and empathic perspective taking were examined. The effects of these strategies on explicit cognition and implicit cognition were examined.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会心理学 社会的認知 視点取得 潜在的態度

1. 研究開始当初の背景

立場が異なる相互作用の相手(例えば利益が相反する, 意見が対立する, 所属集団が異なるなど)に対しては, 過剰にネガティブな動機が存在を推論したり, ネガティブな反応を予測したりすることがある。相手に対するこのような推論や予測は, 円滑な相互作用の障壁となっていると考えられる。

Epley, Caruso, & Bazerman(2006)では, 協働作業において, 相手の立場に立つて考えることがむしろ自己中心的な評価を助長することが示されるなど, 相手の立場に立つことが逆効果となることを示す研究があり, 素朴に相手の立場に立つて考えるという方略は相互作用場面において必ずしもよい結果をもたらさない可能性が考えられた。

相手の立場に立つて考えること自体は一般に望ましいことと認識されており, それをもたらす予期しない否定的な効果を確認することと, そのような否定的影響をもたらさず, 相互作用を円滑にすることに寄与する視点取得の方略を見いだすことが求められる。

そこで, ステレオタイプ適用の抑制において一定の効果を上げることが確認されているシミュレーション方略, さらには相手の感情に焦点を当てる共感方略が素朴な視点取得をもたらす弊害を抑えることができるのかを検討することとした。

2. 研究の目的

立場が異なる他者の立場に立つことがむしろ他者にネガティブな推論や評価が生起するメカニズムを検討し, ネガティブな推論や評価が生起しない方略を探る。特に相手の立場に立つて考える視点取得方略, 相手になったつもりで想像するシミュレーション方略, 相手の気持ちを想像する共感方略がもたらす影響を潜在過程への影響を含めて検討する。

3. 研究の方法

立場が異なる他者に対する否定的な推測や予測が生じる生起メカニズムとその修正可能性について, 実験室実験によって検討した。いずれの実験においても Implicit Association Test によって潜在的自己評価または態度を測定した。また, 実験参加者はいずれも女子大学生であった。

(1) ゲームや協働作業課題を用いた検討

実験室内で実際にゲームや協働作業課題を行い, 意識的に相手を思いやったり, 相手の視点をとることが, 潜在的自己評価, あるいは潜在的態度並びに相手に対する評価や貢献度に応じたような影響を与えるかを検討した。

(2) 立場の異なる相手に対する視点取得の効果の検討

自分とは立場の異なる他者の視点をとることが潜在的自己評価, 他者に対する評価に応じたような影響を与えるかを検討した。他者

の視点をとる方法としては, 他者の立場で考える(視点取得), 他者の気持ちになって想像する(共感), 自分だったらと想像する(シミュレーション)などを取り上げた。

4. 研究成果

(1) ゲームや協働作業課題を用いた検討

囚人のジレンマ(PD)ゲームを用いた検討
2名の実験参加者が実験室において PD ゲームを行った。参加者は相手の立場に立つてプレイすることが要請される思いやり条件と, そのような要請はなく自由にプレイする条件にランダムに割り振られた。ゲームの構造を説明し, 練習試行を行った後, 3回の試行を行った(各試行は10回のゲームで構成されていた)。参加者には個別に(相手にはわからないように)プレイに対する指示をだした。1試行目と2試行目は, 思いやり条件の参加者には相手を思いやってプレイするよう教示し, 自由条件では自由にプレイするよう教示した。3試行目は両条件ともに自由にプレイするよう教示をした。PDゲームと平行し, 自尊心 IAT(Implicit Association Test)を実施した。具体的には練習試行の後に IAT の練習試行を行い, 第1試行の後に IAT の前半課題を実施し, 第2試行を挟んで後半課題を実施した。

IAT 得点に対して条件 × IAT 順序(一致試行が先か, 後か)の 2 × 2 の分散分析を実施したが, 有意な効果は認められなかった。しかし, IAT 得点と2試行目の得点の相関を検討すると, 思いやり条件において自身の得点と IAT 得点の間に負の相関関係があった。これは, 相手を思いやって協力を選択したにも関わらず相手が非協力を選択することが多い場合は潜在自尊心が高くなったことが示唆される。

この実験においては, 第3試行において潜在的自尊心の影響が確認できていないので, 他者を思いやる方略を採用することで変化すると考えられる潜在的自尊心のその後の行動への影響をさらに検討する必要がある。

役割の異なるゲームを用いた検討

2名の参加者が異なった立場で協力しあうゲーム課題(工藤・鈴木・沼崎(1995)を元に作成)を用いて, 異なる役割で協働作業を行った場合の貢献度推定における視点取得の影響を検討した。

またこの実験では自身の利己的な見方を相手の心的状態の推論において用いるかどうかを検討するために, 同じゲームを観察者の立場から見て, ゲームを行う2者の貢献度評定をする観察者条件を設けた。この実験では, 後に述べるように参加者の協働相手は実在せず, 作業に必要な情報のみが与えられた。

ゲーム課題は呈示された4つの単語の中から正解を当てるものであった。ヒント役は正解を知らされており, 回答者役が正解を当てることが出来るようヒントを1語だけだ

すことができる。回答者役はそのヒントに基づき正解を推測するというものであった。例えば、問題が<蝶, 蝉, バッタ, 蟻>という4語で正解が<蝶>だとすると、ヒントとして、蝶を弁別することが出来る単語、例えば<舞う>が適当と考えられる。予備実験に基づき、約8割の問題に対しては正解が推測しやすいヒントが書かれていたが、残りのヒントはそれのみによっては正解を確定することが困難なヒントとなっていた。つまり(実際にはヒント役はいなかったが)ヒント役はできるだけ正解を推測しやすいヒントを出し、そのヒントを元に回答者役が回答する協働作業の形式となっていた。

実験の場面ではヒント役は参加せず、参加者はすべて回答者役となり、ヒント役が出したヒント(と説明された)のリストを受け取り、回答した。成績がフィードバックされた後に、自身とヒント役の貢献度評定(全体を100%とする)、ヒント役の貢献度評定の推測などを行った。また、自尊心 IAT にも回答を求めた。回答者役となった回答者は30問の問題に解答し、その採点結果をフィードバックされた。

観察者条件の参加者は、ゲームがどの程度難しいのかを知るという名目で実際に同じ問題にあるヒント役が出したとされるヒントを用いて回答し、そのヒントで回答した回答者役の成績が知らされた。回答者の回答にかかわらず、すべての条件において同じ成績がフィードバックされた。

回答者役条件も観察者条件においても半数の参加者は貢献度評定の際にまず、ヒント役が貢献度についてどのように考えるか想像するよう教示した(視点取得条件)。残りの半数の参加者は自分が考える回答者の貢献度を回答した。

視点取得によって貢献度の評価が影響を受けるかという点を検討するために、ヒント役の貢献度に対する回答者(ならびに観察者)自身の評価とヒント役による評価の推測を尋ねた。この貢献度の回答に対して、役割(回答者自身・観察者)×視点取得(あり・なし)の分散分析を行ったところ、交互作用効果が有意に近かった。視点取得をしない場合は、回答者役の方が観察者役よりもヒント役の貢献度を高く見積もっていたが、視点取得をするとその差がなくなっていた。つまり、ヒント役の視点をとることにより、回答者は相手の貢献度を低く(すなわち自分の貢献度を高く)見積もることとなった。このような視点取得の効果は、観察者役には認められなかった。また、ヒント役による貢献度の予測においては、視点取得の効果は認められなかった(図1)。

回答者役/観察者それぞれのヒント役の貢献度評価とヒント役による貢献度評価の推測は、観察者条件では正の相関があった。回答者役条件では、視点取得条件でのみ正の相関関係が認められた。つまり、回答者役の

参加者は相手の立場に立って考えることにより、自身の貢献度を高く評価することになった。これは、相手自身が貢献度を高く評価しているだろうと推測したことによる可能性が考えられる。よって、協働作業において、相手の立場に立って考えることは互いの貢献度に対する評価を自己中心的な方向へ歪ませる可能性が考えられる。

一方、協働作業の相手との相対的な貢献度を評価する時、特に視点取得が強制されていないときの評価過程については、本実験のデータから検討する事は難しく、今後の検討課題となった。

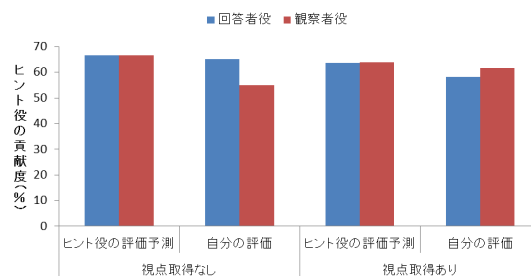


図1 貢献度評定における視点取得の効果

(2) 立場の異なる相手に対する視点取得の効果の検討

相互作用場面の視点取得の効果

相互作用場面のストーリーを読む際に自分がその登場人物だったらどう考えるか(視点取得)、または心的状態を想像する(共感)、特にそのような教示をしない(統制)という3条件を設け、主に潜在的な自己評価(自尊心)への影響を検討した。

ストーリーはある会社員(主人公)が仕事を同僚とともに任されたが、その同僚はほとんど役割を分担せず、主人公1人が働くことになってしまったという内容であった。参加者はストーリーを読んだ後、視点取得条件では、自分がその主人公だったらどのようなことを考えるか、共感条件では主人公はどのようなことを感じるか(想像する)、統制条件では、ストーリーのその後の展開を考えた。この想像課題は間に自尊心 IAT の測定を挟む形で実施した。

潜在的自尊心(IAT 得点)が条件によって異なるか検討したところ、条件の単独の効果は認められなかった。しかし、事前に測定した多次元共感性尺度(鈴木・木野 2008)の他者指向的反応(他者に対する同情や配慮などの共感的配慮)の下位尺度の得点を加えた分析を行ったところ、共感条件と視点取得条件においてこの個人差傾向が異なった影響を与えていることが示された。共感条件では、他者指向的反応傾向が強いほど潜在的自尊心が高くなっていた。この傾向は、他者に同情する傾向が強い場合は、自分ばかり働いている主人公の気持ちを想像した場合に自分の潜在的自尊心が高まることを意味している。一方、自分であつたらと考える視点取得

条件では逆の傾向が認められ、他者に同情する傾向が弱い場合に潜在的自尊心が高まっていた。これは予測していない結果であった。

共感条件においては、主人公に同情するようにストーリーを読むため、主人公に同情した結果、潜在的自尊心が高まったと解釈できる。これは予測に合致する結果であった。一方、視点取得条件において得られた予測していなかった結果は以下のように解釈が考えられる。この条件では主人公を自分と置き換えているため、他者指向的と言うことは、仕事をしない主人公の同僚に対して同情することを意味することになる。そのため、他者指向的傾向が弱い方が同僚に対して同情せず、潜在自尊心が高まったのかもしれない。このように、潜在自尊心は相互作用場面を想像することによっても変動し、限定的ではあるが、共感方略と視点方略では異なった変化をもたらす可能性が示された。

自分と立場の異なる他者

過失による交通事故を起こした人物Aに関するストーリーを用い、その人物の立場に立って想像することが自己評価ならびにその人物に対する評価に与える影響を検討した。

Aの心境を想像する共感条件と、自分がAだったらと考えるシミュレーション条件を設けた。この想像課題の途中に自尊心IATを実施した。さらにAの起こした事故に対する責任や妥当な懲役年数などについての判断を求めた。実験条件に加え多面的共感尺度の視点取得傾向(自発的に他者の心理的観点をとろうとする傾向)の個人差を分析に含めた。

IAT得点に対する実験条件と視点取得傾向の影響を検討したところ、シミュレーション条件においては視点取得傾向が高いほど潜在的自尊心が低下する傾向にあったが、共感条件ではこのような傾向は認められなかった(図2)。

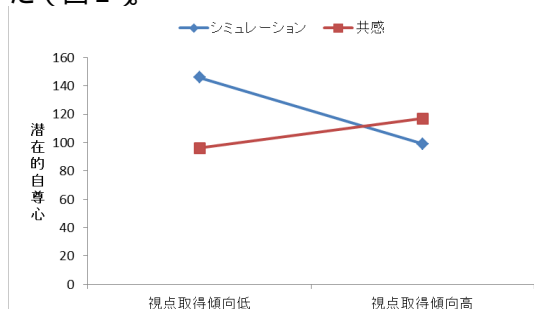


図2 潜在的自尊心

この結果に対応するように、Aに対する妥当な懲役年数についての判断は、シミュレーション条件において視点取得傾向が高いほど期間が短くなっていた。これらの結果から、自分が他者になったつもりで想像するシミュレーション方略と他者の気持ちを想像する共感方略では、自己評価に対して異なった影響があり、さらには後続の判断にも異なっ

た影響があることが示唆された。しかし、これらの効果は、視点取得傾向の個人差によって調整されているため、他者の立場を想像する方略の違いの効果についてさらなる検討が必要と考えられる。

自分と利益が相反する他者

参加者と利益が相反する他者を設定し、その他者の立場で考えることが、自己評価並びに他者に対する評価に与える影響を検討した。具体的には、年金制度の第三号被保険者問題を取り上げ、専業主婦の立場に立って考えることが専業主婦に対する潜在的態度ならびに専業主婦に対する評価に与える影響を検討した。

実験参加者は女子大学生であり、そのほとんどは卒業後就職し、自ら保険金を納める立場になることから、短期的には第三号被保険者とは立場が対立する関係にあると考えられる。実験では、参加者は第三号被保険者の問題について書かれた文章を読み、専業主婦はどう考えるかを想像する(視点取得)条件、自分が専業主婦だったらどう考えるかを想像する(シミュレーション)条件、自分の考えを答える(統制)条件のいずれかに割り振られた。この回答の後、専業主婦とキャリア女性を刺激として用い、専業主婦に対する潜在態度をIATを用いて測定した。さらに、専業主婦に対する顕在的な態度(評価)も測定した。

専業主婦に対する顕在的評価に対して条件の効果を検討した。分析には参加者の性役割に対する態度(平等主義的性役割態度スケール短縮版(鈴木1994)によって測定)の効果も含めて検討した。参加者が平等主義的性役割態度を持つ場合に限定された結果であるが、予測に反して、シミュレーション条件よりも視点取得条件において専業主婦に対する評価が好ましくなっていた。一方、専業主婦に対する潜在的態度においては条件の効果は認められなかった。

シミュレーション条件よりも視点取得条件で専業主婦に対する顕在的評価が好ましくなっていたのは、前者の条件において、専業主婦になりたいと回答する傾向が高くなっていたことと関連があると考えられる。つまり、視点取得をすることにより、専業主婦の恵まれた点(自分自身では保険金を納めなくて良い)に焦点化し、自身を専業主婦の(潜在的)内集団とみなし、専業主婦に対する評価を高めた可能性が考えられる。

ただし、このような効果がシミュレーションではなく、視点取得方略によって生じた理由は本研究のデータのみからは検討する事が出来ず、今後の課題となった。

(3)まとめ

一連の研究から、他者の立場に立つ方法によって後続の自己評価や判断過程に与える影響が異なることが示された。特に素朴な視

点取得（特に方略を指示せずに相手の立場に立って考える）が相手に対する否定的評価、あるいは自分に対する（過剰な）肯定的評価をもたらす可能性が示された。これに対し、シミュレーション方略は相手に利する指向や評価をもたらす可能性が示された。

しかし、このような効果は視点取得に関わる個人差によって調整されており、またその影響も課題によって異なるため、個々の方略がもたらす影響過程の詳細についてはさらなる検討が求められる。

特に、近年、他者への共感に基づく利他的行動が自身の欲求を抑えた上で起こる反応であるのか、それとも逆に最初に生じるのが利他的な反応であり、熟慮することによって利己的な反応が生じるようになるのかが議論の争点となっている。本研究の開始時点では、前者の議論が優勢であり、その観点から本研究は実施されたが、後者の観点も視野に入れた検討が求められる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕(計 3 件)

工藤恵理子 他者の立場で考えるとき - 視点取得とシミュレーション方略の違い
日本社会心理学会第54回大会 2013年11月3日 沖縄国際大学

工藤恵理子 視点取得が自己評価および推論に与える影響 日本社会心理学会第53回大会 2012年11月18日 つくば国際会議場

6. 研究組織

(1)研究代表者

工藤 恵理子 (KUDO Eriko)
東京女子大学・現代教養学部・教授
研究者番号：50234448